

日本鱗翅学会 中国支部会報

第5号



目次

支部長挨拶	1
第5回日本鱗翅学会中国支部例会	2
講演要旨	2
1 チョウの訪花と花の色 本田計一	2
2 山口県錦川沿いで発見したホシミスジについて 後藤和夫	3
3 ギフチョウ個体群の解析 平野和比古	5
4 モンゴルの大草原に蝶を追う 吉田嘉男・中井衛	6
5 鳥取県の環境保護条例について 田村昭夫	8
第5回日本鱗翅学会中国支部例会総会議事録	10
フォーラム	13
草間台地のウスイロヒョウモンモドキ保護の進捗状況(三宅誠治)	13
「レッドデータブックひろしま2003」について(金屋敷章裕)	13
事務局からのお知らせとお願い	14
支部助成金	14
ホシミスジの情報をお教えてください	14
電子メールアドレスをお教えてください	14
第6回支部例会のお知らせ(第1報)	14
第5.1回鱗翅学会大会in松江のお知らせ	14
支部会報の原稿を募集しています	14
寄贈雑誌(支部保管)等リスト	14
支部会員名簿(2004年6月現在)	16
日本鱗翅学会中国支部規約	19
2004年 中国支部役員連絡先	20

<表紙写真説明>

アポロニウスウスバ *Parnassius apollonius* 2003年7月10日撮影
テレルジの奥(吉田嘉男)

支部長挨拶

このご挨拶の中で、毎回その年の気候について触れたいくなるほど、最近の気候には異常さを感じずにはられません。この歳に至るまで台風なるものは秋にやって来るものと承知し、それについて何らの疑念を抱いた記憶もついで思い浮かばないわけですが、このところは心地よい五月晴れの見られる5、6月に、しかも 時季もの と比べても遜色のない程大型の嵐に見舞われることが常態化しつつあるようです。今の子供達は季節と台風をどのように結びつけて育っていくのでしょうか。古来、ごく自然に使われてきた季語もその居場所に戸惑うことでしょうか。エルニーニョや偏西風の乱れなど、直接の原因についてはそれなりの説明はされているものの、それらの元になる根本要因については分からないことが多いようで、これから何が起きるのか不気味さを禁じ得ません。世の中のみならず自然まで穏やかでなくなると、どうしても虫たちのことが気になります。人力では如何ともし難い面があることは頭では判っていても、この2、3月に見られた気温の逆転現象やその後周期的に現れたかなり顕著な気温の寒暖差は誰かの生活を脅かしたに相違なく、みずから被った体調不調とも相まって「おい、どうなってんだ！ 何とかしろ！」と思わず叫んだのも一度や二度ではありませんでした。現に野外ケージで飼育していたベンモンアゲハの成虫が5月中旬から6月上旬にかけて大量に凍死しました。夜間に、八重山では厳冬期でさえ経験することのないような10 近くまで冷え込んだことがありましたから、当然の事であったかと思われれます。ともかく今まで経験したことのない出来事でした。2月の高温が影響してか、一部のアゲハ類の第1化は二山型の発生を見せたようです。しかしこれは普通のアゲハ類にとっては逆に好都合であったかも知れません。が一方で、ギフチョウにとっては迷惑以外の何ものでもなかったことでしょうか。今年は同好諸氏のご援助を得て、ウスイロヒョウモンモドキやヒョウモンモドキの生息地をじっくり観察することができました。局限されたきわどい環境下で生き続けている彼らにとって、気候変動はどのような影響を及ぼすのでしょうか？ もし6、7月に大型台風が中国地方を直撃したらあの弱々しいチョウ達は一体どうなるのでしょうか？ 気候変動の引き金を引いたのが人間だとしたら、彼らの生活保障のための新たな枠組みを策定する努力は、我々人間が負わねばならない責務と言えるのではないのでしょうか。

さて、鳥取県幹事の田村氏のご尽力で昨年11月に第5回目の例会を立派な施設で盛会に開催することができ、ここに支部会報第5号を皆様にお届け致します。会報の編集は昨年同様、事務局の金屋敷氏、並びに田村氏のご尽力によるものです。年を重ねる毎に内容も豊富かつ充実したものになってきました。是非ご高覧下さい。また、本年度の日本鱗翅学会大会は淀江大会委員長の音頭で、11月に松江市において開催されます(支部例会と合同開催)。会員諸氏におかれましてはどうか多数ご参加戴きますようお願い申し上げます。

本田計一

第5回日本鱗翅学会中国支部例会

平成15年11月22日(土)
関金町文化会館(鳥取県関金町)

[第5回支部例会参加者](敬称略)

伊藤國彦, 大屋厚夫, 鎌田博, 金屋敷章裕, 後藤和夫, 田村昭夫, 中井衛, 難波通孝, 布目和子, 英裕人, 平野和比古, 本田計一, 松田祐一, 三宅誠治, 山内健生, 吉田嘉男, 若槻匡志

講演要旨

1 チョウの訪花と花の色

本田計一（広島大・総合科学部）

チョウの成虫が色覚を持つことは、厳密には比較的最近になって証明されたことではあるが、昔から多くの研究者によってさまざまな実験で示されてきた。花が多様な色彩を持ち、特定のチョウが特定の花（あるいは色）に好んで訪れるという現象は少なからず知られているように、チョウ類の訪花行動において花の色彩（視覚刺激）が果たす役割は、花の香り（嗅覚刺激）のそれと共に極めて重要と考えられる。しかし色覚や訪花行動における色選好性が行動学的に詳細に調べられているチョウの種類はそれほど多くはなく、国内のチョウについてはモンシロチョウ（宮川）、ヒオドシチョウ（本田）、ナミアゲハ（木下ら）などに過ぎず、その他、ヒメギフチョウや数種のマダラチョウについて簡単に調べられた例がある程度である。

今回はシロオビアゲハ（♂：34頭、♀：30頭）を用いて、訪花行動における可視色に対する選好性と紫外色の効果を調べたのでその結果を報告する。一辺が4cmの正方形で分光反射スペクトルが既知の、赤、橙、黄、緑、青、紫の各色の色紙（有彩色）と白～黒の6段階の灰色（無彩色）の造花各1枚（計12枚）を直径50cmの円周上に無作為に配置して、これを約3500luxの照明下の室内に置き、ここに約12時間絶食させた成虫（但し、十分に吸水させた）を放して自由に飛翔させ、性別ごとに訪花の回数を記録した。実験にはいずれも訪花経験のない2～7日齢の個体を使い、造花に飛来して口吻伸展反射を示した場合のみを有効な記録とした。

両性共に青と赤をよく好む傾向が見られたが、雄の場合は青>赤>橙>紫=黄の順に、雌の場合は赤=青>黄=橙の順に選好性が認められ、緑色や灰色では殆ど訪花は観察されなかった。全体的にみると雄は寒色系（青+紫で59.8%）、雌は暖色系（赤+黄+橙で68.1%）の色彩を好むという選好性の性差が比較的顕著であった。同様の傾向はナミアゲハ（木下ら）やクロアゲハ（筆者未発表）でも認められ、少なくとも*Papilio*属には共通した性質と推察される。

ところで、一般にこのような実験条件下では白色への訪花は殆ど観察されることがないが、実際に野外では白色花への訪花は頻りに観察される。白色花への訪花が比較的多いのは、花が白色の植物種が多い（虫媒花の約36%）ことが1つの大きな要因と考えられるが、単にそれだけによるものであろうか？紫外線写真を撮ってみると、自然の白色花の多くは中程度～比較的強く近紫外線（UV）を吸収していることが分かった。また中には花冠の色にかかわらず、中心部にUV吸収に起因する明瞭な蜜標を示すものが少なくないことも良く知られている（アブラナなど）。そこで次に、訪花行動に及ぼすUVの影響を調べてみた。

実験方法の細部は省略するが、適度に賦香したろ紙（UVを反射）と酸化チタン処理したろ紙（UVを吸収）を用いて同様の条件下で訪花回数を比較したところ、雌雄共にチタン処理したろ紙への訪花の頻度が有意に高かった。このことは疑いもなく、UVを適度に吸収する白色花を選好することを示しており、恐らくUVを強く反射する白色物体は花として認識されにくいものと推察される。さらにUV蜜標を持つ造花を作成して、彼らが蜜標を認識しそれが採餌行動の効率化に役立っているかどうかを調べたところ、彼らは必ずしも蜜標を利用した効率的な採餌行動を行っているわけではないようであるが、UV蜜標を認識することができ、その認識度は雌において特に優れていると考えられた。緑葉を含めて植物体は基本的にUVを吸収していることから、チョウにとってUVを強く反射するものは自然界では特異なものとして認識されているのかも知れない。そのように考えると、一部の雄に見られる翅の特異なUV反射は、雌にとって異性の認識と選択に極めて有効に機能しているとも推測される。

2 山口県錦川沿いで発見したホシミスジについて

後藤和夫（山口）

2003年6月に当地域から久しく記録の無かったホシミスジ *Neptis pryeri* を21年ぶりに採集し、分布調査を行ない先に後藤（2003）で報告した。

錦川沿いの本種の採集例は旧徳山市（現在周南市）の田原周辺の1個体と菅野ダム付近での1例（未報告）が判っていた。当時の調査も十分なものでなかったこと、その後、報告はもとより噂もまったくなく、いつしか忘れ去られてしまった感は否めなかった。

発見した錦町平瀬地区から周南市須万に掛けての錦川沿いは、10年前から平瀬ダムの建設工事が行われている。その付帯工事として国道の迂回道路の付設が着々と進められ、環境も変貌して一部の動植物を含めた生態系も失われつつある。当地の昆虫類については同好者による調査はほとんどされて無く、断片的な情報のみで終わっていた。その様なことから現状の昆虫相を少しでも正確に把握できればとの考えから、調査に訪れ発見したものである。

6月の調査の概要は既に報告済みでそちらを参照いただきたい。また発見から8月、9月と調べた結果は山口のむし 3に報告済みであるが、県内の非常に特異な分布域から本種の進入ルートなど探るため、山地性の種とすれば逆となる勝手な憶測（仮説）をたててみることにした。

本種がいつ頃から生息していたかは21年以前に遡ると判断できる。そしてその個体は錦川上流部に向かって分布拡大した可能性である。それは過去の菅野ダムの例などから推察され、また古くは下松市の後山から温見地区にかけての情報は、それらを示唆するものとして考察した。

尚、錦川の源となる筋ヶ岳にかけての上流部は把握できていない。これらはこれからの調査の対象となるが、進入の経緯としては島根県内の分布域から判断して、北部島根県側から1000mの山々が連なる県境を越えて進入の可能性は低いと推測した。よって可能性として考えられる広島県側から進入して、錦川沿いに分布を拡大してきたと推察した理由である。

6月の調査から現在判った生息分布域は錦町の須万地から周南市の須万にかけての約10kmである。8月、9月の調査では美川町の河山までが対象となった。8月の調査の時点で既に広島県から進入し分布拡大してきたことが頭の中にあった。そのための裏付けする調べでもあり、当然基本となる生態調査であることは述べるまでもない。川沿いには食餌となるシモツケ属 *Spiraea* のユキヤナギ *S. thunbergii* は下流部には少なくなるが断続的に自生していた。ユキヤナギが少ない原因は河川の護岸工事がごとごとく行われ、部分的にコンクリートが打設されていた。この工事による影響が大きかったと見られる。成虫は須万地一帯まで分布していることが判った。しかし須万地から美川町に掛けては残念ながら生息の手がかりは掴めなかった。引き続き継続調査は実施することとし、その時に考えた進入ルートは下記の様なことになる。

考察したルートは、広島県と山口県の県境を流れている小瀬川流域からの進入の可能性である。そこから広島県大竹市と山口県美和町の境にある弥栄ダムに入り、支流から美和町、美川町と岩国市にまたがる生見川ダムを経由し錦川に合流、ここから本流を遡り美川町を越えてこのたび発見した須万地から須万に至ったという仮説である。（図-2）

そのためにはどうしても美川町付近からの発見を必要とするが、9月までの調査からその目的は果せなかった。本種が県内に分布していることは大島郡（屋代島）が古くから知られ現在に至る。また近隣からは広島県に広く分布していることは判っていたが、佐伯区から2000年9月に1個体採集したこともある。また文献や情報の提供から大竹市から記録されており山口県に一番近い場所となる。

中間の報告書をまとめるにあたり採集品の比較写真を撮り、少しばかり卓上で見聞しその可能性を期待させることも判ってきた。これからそのことについて触れ、少しの補足もおこなうが偏った見識や思い込みがあることをまずお断りしておきたい。

錦川で本種を発見した時は採集品をじっくり検視しなかったが、手元に屋代島（県内）での採集品と県外産の標本が少しありこれとの比較を再考した結果、ある共通する類似点と違いを少しばかり述べてみたい。

- ・第1化は屋代島産の個体が錦川産より一回り大きい。
- ・翅の地色は屋代島産の方が黒の色調が薄く、錦川産の方が一段と黒く濃い。
- ・前翅斑紋 discal band の3室斑紋を屋代島産と比較したところ、屋代島産8割が楕円型になるが、錦川産はいずれもハサミ型となり斑紋も小さい傾向にあることが判った。
- ・広島県佐伯区で採集した2化個体があったので見聞してみると、同様にハサミ型となり翅の色彩から形態まで大差がないことも判った。
- ・年1化性とされる山地（岩場）の岡山県成羽町産の個体も採集していたので比較すると、前翅斑紋 discal band の3室斑紋など含め小さく楕円型となり多少の違いが判った。
- ・参考までに別亜種と区別される奈良県十津川村産の標本1個体もあったので検してみたが、翅全体が黒化しており一見して違いが明らかであった。

概略は以上のようなことだが参考までに比較写真を貼付しておく。(図-1)

これらのことから広島県内陸部の個体が、ここ錦川に進入してきたと推察した第一の考察である。

次に屋代島産の進入の可能性はどうであろうか。同好者の意見もありその可能性を考えてみることも必要であるが、その場合2つの進入経路が考えられる。

一つは大島町から気象条件などの理由で何時かの時点で内陸部の錦川沿いに運ばれて、下流部から上流に向かって分布拡大してきた可能性が思いつく。

二つ目として過去の記録から下松市に何時かの時点で同様の条件で運ばれ、分布を拡大してきたという可能性である。どちらも迷蝶などの記録と同様に可能性は無いとは言えないが、斑紋形態や色彩などから海を越えて運ばれ分布拡大したことより、内陸部の隣県からの進入した可能性の方をここでは考えてみたが、錦川の本種は内陸部と同一系統の個体であると言う方が適切かも知れない。

また瀬戸内海縁質の個体が内陸部へ進入する可能性は、これからの検討事項となろう。

また本種については年1化性の種と2化性の個体の存在が知られている。そこで食餌となるイワガサ *S. blumei* やユキヤナギなどの違い、そして山地(岩場)性の種は年1化との報告があり、山地性の個体群が平地性に移行していくことやその逆のことなど追求する奥は深い。

その他、世界の地理的変異の研究から2新亜種との分類、紀州産から最近の報告にもあるように瀬戸内海沿いの本種は亜種区分としての検討が記されている。これらの多くの研究上の問題は、更に調査からより明らかにされると期待できる。

このたび発見した錦川沿いの個体群は広島県の内陸部に生息する個体が入り込み、そこから分布を拡大して現在に至ったと推察する要素はあるのではと考えた。しかしその様に考察するにはこの度のデータでは不足の事柄が多い。そのために四国産から瀬戸内海の島々、更に広島県内陸部と県内の調査は不可欠となる。推論をより現実に近づける調査と並行して多くの標本の見聞は必要となる。

終わりに6月から9月までの調査と若干の標本の見聞から、憶測と判りにくく成果の上がっていない考察を述べたが、これらは継続調査から現実性のあるものとして取り組めればと考えている。

図-1

図-2



上列(左)屋代島産1化 上列(中)錦川産1化 上列(右)錦川産2化
 中列(左)屋代島産1化 中列(中)錦川産1化 中列(右)錦川産2化
 下列(左)奈良県産1化 下列(中)岡山産1化 下列(右)広島産2化

考察した進入ルート

参考文献

後藤和夫, 2003. 山口県の錦川沿いでホシミスジの生息を確認. 月刊むし, (393): 40-45.
 後藤和夫, 2004. 錦川のホシミスジ生態と分布調査. 山口のむし, (3): 1-3.
 福田晴夫・美ノ谷憲久, 2004. 瀬戸内海に浮かぶ大崎上島はホシミスジの楽園か!? . 蝶研フィールド, (213): 4-7.
 藤岡知夫, 1998. 世界のホシミスジの地理的変異 - 2新亜種の記載含む - . ホシザキグリーン財団研究報告, (2) 263-274.

3 ギフチョウ個体群の解析

平野和比古・渡辺一雄（広島大・総合科学部）・亀山 剛（広島）

ギフチョウの分布は、全体としてみると、東北地方から中国地方まで広く分布しているが、産地ごとにきわめて局地的である。このため、産地間の個体群の交流が頻繁に行われているとは考えにくく、種内分化を示唆する事例が知られている。例えば、幼虫が食草としているカンアオイが地方によって種が異なり、他地方の食草を摂食忌避する例があること、成虫の発生時期が気温に準じて単純に北上しないこと、地方によって成虫の斑紋に一定の変異が存在することなどが挙げられる。

このことから、当研究室では、ギフチョウ自然個体群の個体群構成とその成立基盤の解明を目指して、DNAの変異と飛翔行動の二つの視点から研究を進めている。

(1) ミトコンドリア ND5 遺伝子の一塩基置換の地理的分布

ミトコンドリア ND5 遺伝子の 782 塩基を 41 産地 195 個体について産地ごとに決定し、その一塩基置換の地理的分布を比較した。

782 塩基あたり 15 個の一塩基置換が存在し、一個体内では最大 3 個 (0.4%) 確認された。これらのうちアミノ酸置換を伴うものは 272 番目の塩基 (2 個体) においてのみで、その他はすべて置換を伴わない縮退変異であった。

この一塩基置換の地理的分布は、京都付近を境に本州を二分する広域分布を示す一塩基置換が 2 個、中国地方と周伊勢湾地方に分布する一塩基置換がそれぞれ 1 個ずつ、局地的分布を示す一塩基置換が 10 個であった。また、特定の塩基の一塩基置換個体が同一産地内で同時に共存している場合、すなわち遺伝子多型が認められる産地が 12 産地存在した。そのうちの一産地では、一塩基置換が確認されている塩基においてシークエンサーでの解析結果が『N』となる個体が含まれ、ヘテロプラズミーが疑われた。

これらの一塩基置換の分布パターンを総覧すると、広域型の一塩基置換の分布パターンは食草としているカンアオイの分布パターンとおおむね一致する傾向が認められた。たとえば、中国から近畿に至るサンヨウアオイ-ミヤコアオイ系は広域的に区別され、また近畿から岐阜、愛知に至るヒメカンアオイ (*takaoui*) 系には特異的な一塩基置換が認められる。

局地的な一塩基置換は、その置換がその地域に発生して以来の定着過程をみている場合もあるだろう。これらを解決するには、ミトコンドリアにおいてこのような一塩基置換がいかに出現し、定着し、保持されていくのかのメカニズムの解明が必要である。まずは、一個体のギフチョウの中にヘテロプラズミーがどの程度包含されているかを 782 塩基ひとつひとつについて解決することが基礎課題の一つである。そして、ギフチョウの生活観点からは、その年ごとの発生活消長は著しく変動することを考えれば、産地ごとの産卵可能個体の厳しい絞り込みと、残された個体からの clonal expansion による強いピン首効果が繰り返されていることが推測される。現在の日本列島個体群はその総和を示すと考えねばならない。また、最終氷期の気象条件を考慮するなら、現在の日本海沿いに北上している個体群 (コシノカンアオイ系) は一万年をさかのぼらない新しい群であると考えておかなければならないだろう。

(2) 雄個体のマーキングによる山頂部個体群の飛翔行動

ギフチョウの飛翔行動の意味を理解するため、昨年 (2002 年) と今年 (2003 年)、広島市近郊の標高約 600m の山頂部において個体のマーキングを行い、行動解析を行った。

2002 年 4 月、ピークに集まってくるギフチョウ成虫 29 個体 (27 雄 2 雌) をマーキングした。各個体の飛跡を時間を追って地図上に記入し、飛翔トラックを解析し、雄個体の山頂集合性、日周変化、個体のエイジングによる変化を記録した。その結果、ギフチョウは約 2 週間の寿命を持つこと、山頂固執型個体と非固執型個体の存在が示され、さらに追飛を伴う占有行動と spacing-out の存在、すなわち、『ナワバリ』(渡辺(通), 1988) の存在が指摘された。同一個体で見ると、行動範囲は午前から午後にかけて、また若年期より老年期ほど広くなる傾向が認められた。

2002 年には、約 500m 離れたピーク間の往復移動が一例確認されているので、2003 年は雄 45 個体をマーキングし、各々直線距離で約 500m 離れた 3 ピーク間でマーク個体の移動状況を追跡した。その結果、ピーク間の移動が 13 個体、35 回確認された。そのうち同日内における移動も 9 個体、13 回存在した。

これらの結果から、ギフチョウは山頂集合性と『ゆるやかな縄張り性』によって、散逸を防止しつつ、複数の雄個体がより広い山頂部を同時にカバーしあい、ピークに登ってくる未交尾雌との遭遇機会を増大させていると考えられた。これまでの観察事実の蓄積と解釈（夏秋，1996；渡辺（一），1998）はよく支持される。また、頻繁に異なるピーク間の移動を行っていることから、ギフチョウは整合性の高い飛翔ルートを持つことが示唆される。おそらく『ピーク部を含む尾根筋に執着した飛翔行動』によって説明されると考えられる。さらに、ギフチョウの雄は検出されたデータに限っても、直線距離で約 6km（一日の内では約 1.5km）の移動を行っており、飛翔ルートさえ確保されれば近隣の山地への移動も充分可能であることが判る。

参考文献

夏秋 優（1996）昆虫と自然，31(5)：10-17.
 渡辺通人（1988）Spec. Bull. Lep. Soc. Jap., (6)：273-299.
 渡辺一雄（1998）ホシザキグリーン財団研究報告(2)：165-223.

4 モンゴルの大草原に蝶を追う

中井衛（山口）・吉田嘉男（岡山）

モンゴルでの宿泊

ウランバートル > バヤン・ゴビ > ツェンケル・ジグール > バヤン・ゴビ >
 2003/7/4 昼食 7/5 ~ 7/7 昼食
 ウランバートル > テレルジ No.2cp > テレルジ No.1cp < = = > ボグド山 (7/11)
 7/8 7/9 7/10 ~ 7/12 < = = > バヤンチャンドマン (7/12)
 > ウランバートル > 岡山
 7/13 7/14

採集 約 87 種類， 約 900 頭

	セセリチョウ科	Hesperiidae		シジミチョウ科	Lycaenidae
1	チョウセンオオチャマダラセセリ	Muschampia tessellum dilutior	1	カラガナシジミ	Neolycaena davidi davidi
2	コウアンチャマダラセセリ	Muschampia criberillum obscurior	2	ムラサキハシジミ	Lycaena helle phintonis
3	シラホシチャマダラセセリ	Spialia orbifer lugens	3	ダノウハシジミ	Thersamonia splendens ssp.
4	セトウライチャマダラセセリ	Pyrgus serratulae ssp.	4	フチグロハシジミ	Heodes virgaureae virgaureola
5	コキマダラセセリ	Ochiodes venatus venatus	5	ツバメシジミ	Everes argiades argiades
6	コンマセセリ	Hesperia comma comma	6	クロツバメシジミ	Tongeia fischeri fischeri
			7	コアオシジミ	Cupido minimus minimus
	アゲハチョウ科	Papilionidae	8	ジヨウサンシジミ	Scolitanides orion orithyia
1	オオアカハシロチョウ	Parnassius nomion nomion	9	アオゴシジミ	Maculinea cyanecula cyanecula
2	アホロウシハシロチョウ	Parnassius apollo hesebolus	10	ゴシジミ	Maculinea teleius euphemia
3	ミヤマウスハシロチョウ	Parnassius Phoebus Phoebus	11	キタゴシジミ	Maculineaalcon jennissejensis
4	キアゲハ	Papilio machaon orientis	12	カハシロシジミ	Glaucopsyche lycormas lederi
			13	タイリクアサマシジミ	Lycaeides subsolanus subsolanus
	シロチョウ科	Pieridae	14	イダシジミ	Lycaeides idas ssp.
1	イゾヒメシロチョウ	Leptidea morsei morsei	15	ミヤマシジミ	Lycaeides argyrognomon ssp.
2	ミヤマシロチョウ	Aporia hippia ssp.	16	ルキフェルヒメシジミ	Plebeius lucifer lucifer
3	イゾシロチョウ	Aporia crataegi ssp.	17	カラフトルリシジミ	Vacciniina optilete sibirica
4	オオモンシロチョウ	Pieris brassicae	18	ウスユキシジミ	Albulina orbitulus orbitulus
5	イゾシジミグロシロチョウ	Pieris napi ssp.	19	キアヒメシジミ	Polyommatus cyane kozhantshikovi
6	ヒアレモンキチョウ	Colias hyale ssp.	20	アムールルリシジミ	Plebicula amanda ssp
7	アムールモンキチョウ	Colias tyche tyche	21	ニキアスシジミ	Pseudoaricia nicias borsippa
8	クリソテーモンキチョウ	Colias chrysotheme ssp.	22	ダイトクシジミ	Eumedonia eumedon ssp.
9	オーロラモンキチョウ	Colias heos heos	23	ハマバシジミ	Aricia artaxerxes strandi
10	コハシロモンキチョウ	Colias viluensis chikana	24	コウジレイシジミ	Cyaniris semiargus altaiana

	タテハチョウ科	Nymphalidae			
1	ヒメヒョウモントド	Mellicta britomartis seminigra	25	ギンホシヒョウモン	Speyeria aglaja ssp.
2	クロヒョウモントド	Mellicta plotina plotina	26	ワタシチョウ	Neptis rivularis magnata
3	アウレリアヒョウモントド	Mellicta aurelia distans	27	アカマダラ	Araschnia levana ssp.
4	Mellicta sp	Mellicta sp.	28	シゲテハ	Polygonia c-album c-album
5	タイリクヒョウモントド	Mellicta athalia tinica	26	ワタシチョウ	Neptis rivularis magnata
6	ゴヒョウモントド	Mellicta ambiguus kenteana	27	アカマダラ	Araschnia levana ssp.
7	アジアカヒョウモントド	Mellicta centralasiae centralasiae	28	シゲテハ	Polygonia c-album c-album
8	アトクヒョウモントド	Melitaea cinxia clanissa	29	ヒオトシ	Nymphalis xanthomelas ssp.
9	ギンホシヒョウモントド	Melitaea diamina hebe	30	ゴヒトシ	Aglais urticae ssp.
10	ヒメヒョウモントド	Melitaea arcesia arcesia	31	ヒメアカテハ	Cynthia cardui
11	フォエバヒョウモントド	Melitaea phoebe changaica			
12	ラトニゲラヒョウモントド	Melitaea latonigena latonigena		ジャノメチョウ科	Satyridae
13	スチャンヒョウモントド	Melitaea sutschana sutschana	1	ウラジヤノメ	Lopinga achine achine
14	フチクヒョウモントド	Melitaea didymoides ssp.	2	ツマシロウラジヤノメ	Lasiommata deidamia deidamia
15	チョウセンヒョウモントド	Euphydryas aurinia ssp.	3	キイロヒメカゲ	Coenonympha amaryllis ssp.
16	ヤチヒョウモン	Procllossiana eunomia asiatica	4	ユラシヒメカゲ	Coenonympha glycerion iphicles
17	ハリホシヒョウモン	Clossiana oscarus oscarus	5	シロホシヒメカゲ	Coenonympha hero perseis
18	ナカギンヒョウモン	Clossiana selene complex	6	クモマヒメカゲ	Erebia ligea eunomia
19	ミヤマヒョウモン	Clossiana euphrosyne umbra	7	キタヒメカゲ	Erebia neriene neriene
20	ハクタクヒョウモン	Clossiana angarensis angarensis	8	キイロヒメカゲ	Erebia cyclopia
21	クビヒョウモン	Clossiana selenis sibirica	9	メトウサヒメカゲ	Erebia medusa transiens
22	ホリハヒョウモン	Clossiana thore hypercala	10	ハイラルヒメカゲ	Boeberia parmenio
23	クカヒョウモン	Clossiana titania staudingeri	11	クハヒメカゲ	Oeneis tarpeia geossi
24	ゴヒョウモン	Brentis ino ssp.	12	スズメヤノメ	Satyrus ferula liupiuschani

セセリチョウ科 6種類, アゲハチョウ科 4種類, シロチョウ科 10種類

シジミチョウ科 24種類, タテハチョウ科 31種類, ジャノメチョウ科 12種類

成果 北海道北見市のモンゴルの蝶の著者矢崎氏によると, モンゴル初挑戦で大成果と評価を頂く。

オオモンシロチョウ モンゴル2例目, シラホシチャマダラセセリ モンゴル2例目の記録

エゾスジグロシロチョウは発香鱗での確認

蝶のガイド, 通訳, 運転手と車, 天候に恵まれ, タイトル通りモンゴルの大草原に蝶を追いました。

モンゴルへ行くきっかけは去年の夏, 若槻, 中井, 吉田の3人で対馬へ旅行した帰りに, 中井さん宅へ泊めて頂いたとき矢崎さんのモンゴルの蝶“ジャノメ編”見たとき, 中井さんから北の蝶も良いぞ! の一言で, 若槻さんが, モンゴルへのルートを探し, 吉田が利用しているアジアコミュニケーションへ採集旅行の企画を依頼した。構想が決まった頃はイラク戦争の勃発と, SARSの最中でしたが, 中井さんの“僕は一人でも行く”の一言でモンゴル行きが実現した。

首都のウランバートルは北緯47度55分で北海道の稚内と同緯度となる。

モンゴルの面積 約156万6500km² 日本の約4倍(2001年地球の歩き方より)

モンゴルの人口は 244万人 人口密度 1.56人/km²

ウランバートルの標高 約1350m 人口76万人 人口密度559人/km²

ツェンケル・ジゲールの標高 約1800m

テレルジの標高 約1300m

モンゴルの例外はあるが概ね南斜面は草原, 北斜面はタイガとなっているようだ。

近年異常気象が雨が多く虫が大発生し, 殺虫剤を撒いたようだ。マイマイ蛾の幼虫に似た毛虫をポプラ等で沢山見た。

ロシアの山火事で空に霞が掛かり太陽がボンヤリとし, 気温にも影響している。

バヤン・ゴビは砂漠の中にアルタイムレスズメ、柳などの灌木が生えた緑の帯で砂丘が遠くに見える。豆科のアルタイムレスズメは背丈の低い棘のある灌木で砂漠に生息するカラガナシジミが見られる。ネットは最初の一振りで大穴ができた。その後、カラガナシジミは広大な砂漠に広がるアルタイムレスズメの大群落の何処でも見られた。

ツェンケル・ジグールの手前にある川は、我々が行く前の大雨で増水し渡れるか心配したが、ランドクルーザーは頼もしかった。ツェンケル・ジグールは青い翼と言われ草木に覆われた土地で何処までも続く大草原のお花畑、カラ松からなるタイガ（森林）と温泉があり緑豊かなところ

7時頃キャンプに着いたが寒くストーブが欠かせない。夜中にストーブを焚きに何度か起きた。外の気温は2.5を示していた。空気が澄み夜の星はとても美しく、近くに見えた。

採集も気温が上がる10時頃に草原に行きましたが、蝶が少なく、とても心配したが気温が上がれば沢山飛び出した。それでも、この時期には3種類の白い大きな蝶が発生しているはずだが姿が見えないので、いらいらしました。

7/7は昼食を食べに食堂まで帰ったが、ネットを持って車を降りると、食事の時くらい置いたらと中井さん、持っていて良かったで2例目のオオモンシロチョウを食堂の裏で採集できた。

テレルジは風光明媚な保養地で観光客用のキャンプ（ゲル）が点在。

草原に連なり山には必ず巨大な岩山が露出している。車窓から見た有名な亀石は本当に大きい。

ボグド山はウランバートル近郊にあり、中国に侵略されていた時代、独立のため各部族が集結した歴史のある土地で現在は保養地。

小川沿いに草むらやカラ松があり石の苔には沢山のシジミ類が吸水し、少し離れたところではミヤマシロチョウの吸水集団やエゾヒメシロチョウも見られた。

少し山に登ると、大きな石がゴロゴロした斜面は乾燥し疎らに草が生え、ダイオウの群落が点々とあった。ダイオウベニシジミ、アオゴマシジミ、ゴマシジミ等を採集した。

バヤンチャンドマンもウランバートル近郊に位置し、谷の奥はモンゴルに生育する植物はほとんど見られる所で谷の入り口は砂漠、奥に行くに従い草原、背の低いブッシュ、林、森林と続く。草原にはセセリ類、シジミ類、小型のヒョウモンが、エゾスジグロシロチョウ、ウラジャノメ、ムラサキベニシジミもいた。

モンゴルで2例目のシラホシチャマダラセセリが採集できた。

モンゴルは砂漠の国と思っていましたが、確かに砂漠の国でした。しかし北部には草原・森林・川・山脈があり、とても美しい国で、スタッフと天候に恵まれ、蝶を追うことができました。

5 鳥取県の希少野生動植物保護条例について

田村昭夫（鳥取）

鳥取県では、1993年に「鳥取県のすぐれた自然」動物編、植物編、地学編の3冊を発行した。その後2002年3月に「レッドデータブックとっとり - 鳥取県の絶滅のおそれのある動植物 - 」動物編、植物編の2冊を発行した。その中で動物は296種掲載され、そのうち昆虫109 鱗翅目39種（全種がチョウ）が取り上げられた。また県は「鳥取県希少野生動植物の保護に関する条例」（2001年12月公布、2002年9月施行）を制定した。県は条例の中で「特定希少野生動植物」を選定した。「この「特定希少野生動植物」はレッドデータブックとっとり - 鳥取県の絶滅のおそれのある動植物 - 」に掲載されている種である。

条例でいう「特定希少野生動植物」の定義は以下の通りである。

特定希少野生動植物の種は、その県内における生息・生育状況が、人為の影響により存続に支障を来していると判断される種（亜種又は変種がある種にあつては、その亜種又は変種とする。以下同じ。）

で、次のいずれかに該当するものを選定する。(1)個体数が著しく少ない種、又は著しく減少しつつある種(2)分布域の相当部分で生息地等が消滅しつつある種(3)分布域が限定され、かつ、その生息地等の生息・生育環境が著しく悪化している種(4)分布域が限定され、かつ、その再生産能力を上回る過度の捕獲・採取が行われている種(鳥取県希少野生動植物保護基本方針第2条より)。

「特定希少野生動植物」に昆虫は、ウスイロヒョウモンモドキとコガタノゲンゴロウが指定された。

ウスイロヒョウモンモドキは上記4項目(特記事項:捕獲による絶滅が特に懸念される。草原の減少と放置による生息環境の悪化)に、コガタノゲンゴロウは(1)(3)(特記事項:水辺環境悪化,外来魚による捕食,捕獲圧)に該当する。

この条例は6章38条と附則からなり、ここで条例のポイントを述べれば次の4点に整理される。

「特定希少野生動植物」の指定

絶滅のおそれがあり特に捕獲が必要な主として指定された「特定希少野生動植物」の捕獲は禁止。(学術研究,繁殖,保護のための移動・移植などの目的で許可を得た場合を除く。)

「自然生態系保全地域」の指定

希少野生動植物の保護と自然生態系を守るために重要な地域は、「自然生態系保全地域」に指定地域指定に係る希少野生動植物の捕獲等を行う場合は、届出が必要である。

「自然生態系保全地域」はさらに保全地区(自然生態系保全地域のうち、保護管理地区に属さない区域であるが、工作物の設置等は届け出が必要である。),保護管理地区(特定希少野生動植物の保護のため特に必要な区域であり、工作物の設置等は届け出が必要である。),立入制限地区(特定希少野生動植物の生息等のため特にその保護を図る必要がある場所であり、立入の制限がある。)

「保護管理事業」の推進

特定希少野生動植物の繁殖や生息・生息環境作りのための事業の推進。

「罰則」

特定希少野生動植物の無許可による捕獲など、条例に違反した場合、1年以下の懲役または50万円以下の罰金に処されることがある。

以上県条例のポイントを挙げたが、今回の条例は制限ばかりではないことが分かる。

2004年3月20日には「野生動植物保護セミナー」が開催され、県民への啓発活動が進められている。このセミナーではコガタノゲンゴロウ、サクラソウ、ブッポウソウが話題として取り上げられた。

県は「保護管理事業」を2004年度予算で行う。これは条例の基本方針のなかで「第5 保護管理事業に関する基本的な事項」に示され、条例の「第4章 保護管理事業」「第5章 雑則」によるものである。

2003年度のウスイロヒョウモンモドキ、コガタノゲンゴロウの調査に基づき、ウスイロヒョウモンモドキ(鳥取自然保護の会)については東部地区を中心に保護管理活動を行い、コガタノゲンゴロウ(鳥取昆虫同好会倉吉支部)が中部地区を中心に再度分布調査を行うことが決定し、予算も付いた。その他のサクラソウ、ブッポウソウ、コアジサシなどの希少種についても保護活動に予算が付き、それぞれが活動を開始した。

今後これらの保護活動を実施するに当たっては、すでに実施活動に当たられている諸団体の経験や知恵の情報交換をお願いしたい。

第 5 回日本鱗翅学会中国支部例会総会議事録

平成 15 年 11 月 22 日 (土)
関金町文化開館 (鳥取県関金町)

本田支部長の進行により行われた。

1) 会計報告

つぎの 2003 年会計について、2003 年 9 月 17 日時点での会計報告が行われ、了承された。

収入の部 8 2003 年 1 月 1 日 ~ 9 月 17 日

収入内訳	金額	備考
前年度繰越金	147,692	
2003 年度支部交付金	16,100	
2003 年度支部活動助成金	52,800	
寄付金 (第 4 回支部例会余剰金)	14,854	
預金利子	6	
計	231,452	

支出の部

支出内訳	金額	備考
第 4 回支部例会 (H14.12) 補填費	49,067	
支部会報第 4 号印刷費	21,000	10 円 (モノクロ) × 21 枚 × 100 部
支部会報第 4 号郵送料	12,170	
「岡山県蝶類データ集」購入費	12,000	
「続・日本産蝶類文献目録」購入費	10,000	
雑費	1,860	宛名ラベル等
計	106,097	

来年度繰越金

231,452 円 - 106,097 円 = 125,097 円

補足説明 繰越減となっているのは、2 冊の図書の購入が大きな原因

2) 役員改選

次期支部長について、

現本田支部長の任期は 2003 年まで。現評議員間の互選により、次期支部長として後藤和夫氏を選出し、総会で承認された。しかし後藤氏から、2004 年度については就任を固辞されたため、2004 年度に限って本田氏が支部長を継続することで了承された。支部規約によると支部長の再任は認められていないが、任期規定「原則 3 年」を適用し、さらに 1 年間の続投を了承した。

(本田支部長談)

支部長を評議員の互選とした規定の背景は、本部の評議員会出席が可能となり意見を出しやすい状況を作るため、2005 年以降については、新しい方でよろしく願いたい。

日本鱗翅学会中国支部規約

(選出)

第 8 条 支部長は日本鱗翅学会中国地区選出の評議員の中から互選し、総会において承認を得るものとする。

(任期)

3) 各県幹事の選任

各県幹事が承認された。

鳥取県 田村昭夫、島根県 淀江賢一郎、岡山県 吉田嘉男

広島県 金屋敷章裕 (事務局兼任)、山口県 後藤和夫、会計 渡部佐知子

4) 助成金の申請

(田村・鳥取)

今回も第6回中国支部例会開催，支部会報第5号発行のための助成を日本鱗翅学会本部へ平成15年9月29日に申請した。

第6回支部例会は，総会とは別に一般講演を募集し支部会員の研究・報告を行なうとともに，標本・書籍などの展示を行なう。（例えば，全国大会は～16:00，以降に支部例会）

（本田支部長）

第50回鱗翅学会の評議員会の状況では，特にクレームはなかったが，新評議員の決定後，新体制により最終決定される。

5) 第51回日本鱗翅学会大会について（淀江賢一郎）

第51回日本鱗翅学会大会は，中国支部が担当して島根県松江市で開催されます。

松江市は，「ラフカディオ・ハーン 蝶の幻想」でおなじみの，小泉八雲記念館などがある国際文化都市です。

ぜひ，皆様お越しください。

日程 2004年11月6日（土）12:30 ～ 11月7日（日）16:30

6日 シンポジウム，一般講演，記念撮影，懇親会

7日 一般講演，ポスター発表，総会

シンポジウムは，「ウスイロヒョウモンモドキの現状と保護活動について」を考えています。

6) その他

恩原高原のウスイロヒョウモンモドキ特別委員会設置について（難波通孝）

恩原高原のウスイロヒョウモンモドキにつきましては，1998年の第44回大会（東広島市）でその問題点をシンポジウムで取り上げていただきました。その中で日本鱗翅学会で対応してはどうかと提案していますが，時間が無くて十分な討議ができていません。

1998年から毎年7月1日～25日まで採集を目的とする立ち入りを規制して現在に至っています。

規制の期間中は地元の警察がパトロールをして注意しています。規制をはじめた当初は，トラブルも少しはあったようですが，ここ2～3年はおおむね守られているようです。日中は1人も見ないことが多くあります。ただ，午後4時ころから訪れる車が度々ありますので少し気がかりです。

2003年3月発行の岡山県版レッドデータブックで本主が絶滅危惧種に指定されたことから早速マスコミが取材にきました。恩原高原のある上齋原村では，この蝶を取り上げるのはよいが，村名と場所を伏せて下さいとのことでした。看板を立てて保護に取り組んでいるのにどうしてかと思いつくと，「少し前のテレビ番組でネマガリダケ（すずのこ）の放送をしたところ，岡山市の方から多く来て困った。」とのこと。「同じようなことがあれば責任を取れない。」というものでありました。

この蝶を採集する方（ほう）は，この場所のことも規制のことも全員知っているのに，行政の方（ほう）の理解はまだまだのようであります。

上齋原村は，平成17年3月1日で他町村との合併をひかえています。岡山県では，本種の種指定を検討しているとのこと，今後ますますウスイロを取り巻く環境が多様になると思います。

全国的にも注目される恩原の生息地について，これから少しでもしっかりした対応をしていきたいと考えて特別委員会の設置をしていただいたわけであります。

今後につきましては，とりあえず第1回の話し合いを明日11月23日，上齋原文化センターで開きます。

最後になりましたが，特別委員会の設置にあたりましては，本田支部長と淀江自然保護委員長にご努力をいただきました。お礼を申し上げます。

草間台地のウスイロヒョウモンモドキについて（三宅誠司）

河邊先生が中心となって岡山県の虫屋が，去る2003年3月8日集会を行った（参加者9名）。

岡山県内での産地は，10ヶ所以下となっており，保護が必要な状態であり，今なら保全の可能性のあることを現状認識した。

保護の方法としては，地元住民への働きかけ，行政（新見市）への働きかけが必要。また，意見の出所を1つにする必要があることから，日本鱗翅学会自然保護委員会へ特別委員会を設置し，活動を開始した。

現状では，土地所有者が不明であったり，茅場など草刈りの入会権等があり関係者へ声をかけるのも困難な状況もあるが，地区総代に，種の重要性和，それを守ってきたのは，草刈り等これまで自分達がやってきたことであることを説明した。

行政（新見市）へは，地域の木長な財産である等メリットを説明した。

これにより，来週には勉強会と生息地の保全活動である草刈りを行なうこととなった。草刈りの人手は足りない状況にあるが，今後も継続的に行なっていくことが重要であると認識している。

しかし，個体数の激減はどうしようもなく，一次的な増殖もやむを得ないと考えている。

また，単独の発生地でなく複数の発生地を確保することが今後の課題であると考えている。

（難波通孝）

恩原高原も現在では1箇所のみとなっており課題と認識している。



吉田さんのモンゴルの写真はとても綺麗でした。 とても広い立派な会場でした。



標本展示の周りには自然と人が集まります。



田村さん幹事お疲れさまでした。

フォーラム

草間台地のウスイロヒョウモンモドキ保護の進捗状況

三宅誠治（岡山県）

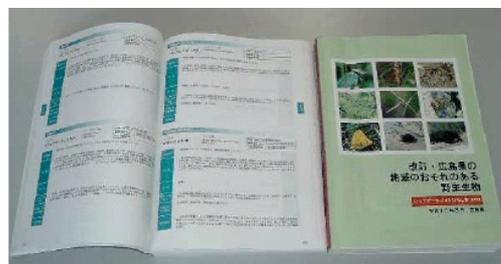
昨年11月30日に、新見市土橋地区の住民を始め新見市職員、近隣の環境関連団体の方々66名が参加して生息地の草刈りを行いました。また、それに先だって勉強会も開きましたが、ここでも積極的な質疑が行われ、地区住民の保護に対する関心の高さに声をかけた我々の方が驚きました。その成果が問われる今年の発生状況ですが、去る6月13日に観察会と二回目の勉強会を開きました。ここでも、草刈りと同様に多くの参加者があり、その盛り上がりには確かな手応えを感じることができました。肝心のウスイロヒョウモンモドキは、個体数こそ多くはありませんでしたが（約10頭）、好天に恵まれたこともあって参加者全員が間近に優雅な舞いを観察することができました。個体数の回復にはまだ多くの苦労があるかとは思いますが、これからも地区住民の方々や新見市関係者と協力して保護を進めていきたいと考えています。皆様方のご理解とご協力をお願いいたします。

「レッドデータブックひろしま 2003」について

金屋敷章裕（広島県）

広島県では、1995年に発行したレッドデータブックを、今回新たに選定種を加えるなど、改訂版として「改訂・広島県の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックひろしま 2003」を作成しました。

今回の作成に当たっては、会員の中村慎吾氏が「広島県版レッドデータブック見直し検討会委員」として参加され、神垣健司氏・亀山剛氏・新谷隆之氏・渡辺一雄氏が協力されています。



鱗翅目の掲載状況は次のとおりです。なお種名の後の（ ）書は1995カテゴリーを示します

・絶滅（EX）

ムモンアカシジミ（絶滅危惧種）、オオウラギンヒョウモン（絶滅危惧種）

・絶滅危惧 類（CR + EN）

ヒメシロチョウ（絶滅危惧種）、ミナミアカシジミ（-）、クロシジミ（絶滅危惧種）、キマダラルリツバメ（危急種）、シルビアシジミ本土亜種（-）、ウスイロヒョウモンモドキ（絶滅危惧種）、ヒョウモンモドキ（危急種）、ウラジャノメ（危急種）

・絶滅危惧 類（VU）

キバナセセリ（-）、ヒロオビミドリシジミ（-）、ウラジロミドリシジミ（-）、ウラナミアカシジミ（-）、ゴマシジミ（危急種）、ヒメシジミ本州・九州亜種（-）、ベニモンカラスシジミ（危急種）、ヒメヒカゲ（希少種）、キマダラモドキ（-）、ウラナミジャノメ本土亜種（-）

・準絶滅危惧種（NT）

ホシチャバネセセリ（-）、ギンイチモンジセセリ（-）、スジグロチャバネセセリ（-）、ギフチョウ（危急種）、カラスシジミ（-）、クロツバメシジミ（危急種）、オオムラサキ（希少種）、クロヒカゲモドキ（-）、ホソバミツモンケンモン（-）、ナマリキシタバ（-）、オオシロシタバ（-）、フシキキシタバ（-）、マイコトラガ（-）

1995リストで希少種としたミカドアゲハは移入種であり、しかも現在問題化している南方系昆虫の北上問題と関係があると考えられるので除外されています。

問合せ先 広島県環境局自然環境保全室 野生生物グループ

電話：082-513-2933（直通）E-mail：kanshizen@pref.hiroshima.jp

販売価格 2,800円（消費税込み・送料は別途必要です。申込み先へお問合せください。）

購入申込先 産興株式会社（〒730-0847 広島市中区舟入南1丁目1-18）

電話：082-232-6823，FAX：082-232-6573，E-mail：nbook@pnet.gr.energia.co.jp

申込み方法 申込先へ郵便，FAX，電子メールのいずれかにより，次の内容を明記して申し込んでください。住所・氏名・電話番号・購入冊数・代金支払方法（代引き・銀行振込）

詳しくは，こちらをご覧ください。

広島県のHP <http://www.pref.hiroshima.jp/eco/j/j2/reddata/reddata2003.pdf>

事務局からのお知らせとお願い

支部助成金

2004年度分として本部から支部交付金17,100円と支部助成金36,150円、合わせて53,250円が交付されました。

ホシミスジの情報をお教えてください

第5回の支部例会で講演された後藤さんが、山口県のホシミスジとの関連を調べるため、広島県西部のホシミスジの情報を募集しておられます。特に太田川上流部や小瀬川流域のものがよいとのこと。

お持ちの方は、事務局又は後藤さんにご連絡ください。

後藤和夫 〒759-0207 宇部市厚南七区平和町 電話 0836-41-1164 FAX 0836-41-1177

e-mail gotoh@h6.diom.ne.jp

電子メールアドレスをお教えてください

末尾に2004年5月現在の支部会員名簿を載せておりますが、電話番号や電子メールアドレスが未掲載の方がたくさんおられます。会員相互の連絡を容易にするためにもできるだけ電子メール情報は掲載したいと考えておりますので、お持ちの方は次回例会案内の返信の際にでも差し支えない範囲でお知らせ戴きますようお願い致します。また、先々、各種のご案内や会誌などの電子配信が可能になりますと経費の節減にも大きく貢献しますので、何卒ご協力をお願いします。

第6回支部例会のお知らせ(第1報)

今年の支部例会の日程が決まりました。

日時 2004年11月7日(日)16時~18時

場所 島根大学(松江市西川津町)

参加費 会員500円、非会員1,000円

懇親会場 島根大学近くの居酒屋(懇親会参加費4,000円)

連絡先 〒691-0076 平田市園町沖ノ島1659-5 ホシザキグリーン財団内 林成多あて

TEL.0853-63-7110, FAX.0853-63-7112, e-mail hgf-haya@green-f.or.jp

発表等を計画されている方は、9月末日までに林まで連絡してください。

(スライド, OHP, パソコン使用可)。

この支部例会は、11月6~7日に開催される第51回大会の終了後、引き続き島根大学の中で会場をかえて開催されるものです。すなわち11月6日の夜は本大会の懇親会が市内の「サンラポーむらくも」というホテルであります。

翌7日の夜は支部例会の懇親会が連チャンであるということです。お楽しみに!

なお、宿泊は各自でお申し込み下さい。松江市内では駅前にあるユニバーサルホテルが1泊2食付で5000円と、超お得です。また、中国支部会員の方で6日、7日と2泊していただける方には、なんらかの優待をいたしておきます。人数を知りたいので9月中ごろまでには申し込んでください。

第51回鱗翅学会大会 in 松江のお知らせ

すでに「やどりが」紙上で2回にわたってご案内しておりますが、11月6~7日に、島根大学(松江市西川津町)を会場にして第51回大会が開催されます。中国支部のみなさまにはぜひともご参加

くださいますようお願いいたします。

大会は11月6日午後12時半受付開始。6日は一般発表，ポスター発表。夜は懇親会。7日の午前9：00～10：00に総会。10：00から去る4月2日に逝去された白水隆名誉会長の追悼行事を行います。その行事の概要は次のとおりです。

「白水隆名誉会長の追悼行事」次第

日時：11月7日10：00～15：00

進行役：星川和夫（島根大学教授）

はじめに：高橋真弓会長

矢田修さん（チョウの分類・系統）

工藤忠さん（チョウの生活史）

朝日純一さん（チョウの生物地理）

難波通孝さん（チョウの保護）

森中定治さん（チョウの遺伝・進化）

福田晴夫さん（迷チョウ）

小岩屋敏さん（ゼフィルス）

三枝豊平さん（白水チョウ学とは何か）

以上，お一人30分以内（質疑含めて）で，白水先生とのかかわりと白水先生が関心をもっておられた分野の最新の状況を語っていただきます。アマチュアを大切にされた白水チョウ学の全体像が浮かびあがればと思っております。ご期待ください。

なお，翌11月8日（月）にはエキスカーションもあります。希望者に島根県立宍道湖自然館ゴビウス（平田市園町）の見学と白水隆蔵書コレクションの公開をするものです。費用は2000円。以上のお申し込みは「やどりが201号」添付の振り替え用紙で，なるべく早めをお願いします。

中国支部からの一般発表も多いほど喜びます。お待ちしております。

この51回大会についてのお問い合わせは，上記，林成多0853-63-7110まで。

島根大学およびその付近には車の駐車場がほとんどありません。車でお出かけのときにはホテルに駐車してからバスでお出かけください。

支部会報の原稿を募集しています

H17年6月に発行予定の支部会報第6号の原稿および表紙の写真を募集しています。

会員の皆様の近況についてお知らせください。

寄贈雑誌（支部保管）等リスト

「山口むしの会」の後藤和夫氏から新たに下記雑誌の寄贈を受けました。

・山口のむし No. 3

中村慎吾氏から「レッドデータブックひろしま2003」を寄贈いただきました。

以上大変有り難うございました。尚，支部購入図書として以下のものを保管しています。閲覧を希望される方は事務局までご連絡下さい。

・三宅誠治 著，「岡山県蝶類デ・タ集」，2002

・白水 隆 編著，「続・日本産蝶類文献目録」，2003

（注）16～18頁は会員の個人情報掲載のため、このオンライン版では削除しています。

日本鱗翅学会中国支部規約

(2001年12月2日制定)

第1章 総則

(名称)

第1条 本支部は日本鱗翅学会中国支部と称する。

(目的)

第2条 本支部は支部会員相互の交流を図り、鱗翅目昆虫についての理解を広めることを目的とする。

(事務局)

第3条 本支部に事務局を置き、事務局を本支部の所在地とする。

(事業)

第4条 本支部はその目的を達成するために次の事業を行う。
(1)年1回例会(総会を含む)を開催する。
(2)年1回日本鱗翅学会中国支部会報を発行する。
(3)その他、適当な行事を行う。

第2章 支部会員

(組織)

第5条 本支部は中国地区(広島・岡山・鳥取・島根・山口の各県)に在住する日本鱗翅学会会員をもって組織する。

(義務)

第6条 本支部の会員は住所(連絡先)、氏名などに変更のあるときは遅滞無く事務局に通知するものとする。

第3章 役員

(種類)

第7条 本支部に次の役員を置く。事務局は支部長、事務局幹事、会計で構成する。

- (1)支部長 1名
- (2)事務局幹事 1名
- (3)幹事 4名
- (4)会計 1名

(選出)

第8条 支部長は日本鱗翅学会中国地区選出の評議員の中から互選し、総会において承認を得るものとする。
幹事(事務局幹事を含む)は第5条の各県の各県の会員の中から推薦され(1名ずつ選出。自薦を含む)、総会において承認を得たものとする。選出方法は各県の裁量による。
事務局幹事は原則として支部長在住の県から選出された幹事がこれを務める。
会計は支部長が会員の中から推薦し、総会において承認を得たものとする。

(職務)

第9条 支部長は本支部を代表し、支部会務を統括する。支部長に事故があった場合、支部会員の資格を失った場合は、当該年度内の残任期間に限り他の評議員が支部長の職務を代行する。この場合総会の承認を必要としない。
事務局幹事は支部長を補佐し、支部運営上必要な業務を行う。
幹事(事務局幹事を含む)は例会の開催、会報の発行、その他支部運営に必要な業務の遂行に協力する。
会計は支部資産を掌握し、出納事務を行う。

(任期)

第10条 支部長の任期は原則3年とし、再任を認めない。
事務局幹事の任期は原則3年とし、再任を認めない。
幹事の任期は1年とし、再任を妨げない。
会計の任期は原則3年とし、再任を認めない。
第4章 例会、総会および会報

(例会の内容)

第11条 例会は原則として支部会員による研究発表、調査・採集報告などで主に構成され、必ず総会を含むものとする。

(開催地)

第12条 例会は各会計年度内に少なくとも一回おこなうものとする。
例会は広島県、岡山県、鳥取県、島根県、山口県の順で開催するものとする。

(例会の運営)

第13条 例会は前条開催地の幹事が主催する。

(総会の運営)

第14条 総会は支部会員をもって構成する。
総会の運営は事務局が担当し、議長は支部長が務める。ただし、他の評議員または幹事による代行も可とする。
総会の議決は出席した支部会員の過半数をもって決し、可否同数のときは議長の決するところによる。

(会報)

第15条 会報は例会を主催した幹事が草稿を作成、編集する。
会報は事務局が発行し、例会開催翌年の6月末までに支部会員全員に配布する。

第5章 会計

(経費)

第16条 本支部の経費は次に掲げるものをもってこれに当てる。
(1)支部連絡費(本部より交付) 200円/年/会員
(2)支部助成金(本部に申請)
(3)寄付金、その他

(資産の管理)

第17条 本支部の資産は事務局が管理する。

(決算)

第18条 本支部の会計状態及び収支決算はこれを総会で報告し、承認を得なければならない。

(会計年度)

第19条 本支部の会計年度は毎年1月1日に始まり、同年12月31日に終わる。

第6章 補則

(会則の変更)

第20条 本支部の会則を変更する場合は、総会の議決を経なければならない。

(委任規定)

第21条 この規約に定めるもののほか、本支部の運営に関して必要な事項が発生した場合は、評議員及び幹事との協議に基づき、事務局がこれを定めることができる。ただし、その事項は次回総会において承認を得なければならない。

附則

この規約は、平成14年1月1日から実施する。

(支部例会について：第4回支部総会申合せ事項)

例会参加費

2003年から、学会員500円、非学会員1,000円とする。

参加費を支払って参加した非学会員には、例会の記事が記載された翌年発行の支部会報を一部送付する。

総会開催中は会員外の者の傍聴は認めるが、発言権、議決権は認めない。

2004年 中国支部役員連絡先

支 部 長 本田計一

〒739-8521 東広島市鏡山1-7-1 広島大学総合科学部

Tel:0824-24-6501 Fax:0824-24-0758

E-mail:honce@hiroshima-u.ac.jp

事務局幹事 金屋敷章裕

〒730-0001 広島市中区白島北町18-3-1307

Tel:082-221-8596 Fax:082-221-8596

E-mail:akaneya@ms4.megaegg.ne.jp

会 計 渡部佐知子

〒739-0047 東広島市西条下見6-2-8-504

Tel:0824-24-8012

E-mail:sachi-gon@nifty.com

広島県幹事 金屋敷章裕(同上)

岡山県幹事 吉田嘉男

〒706-0304 岡山県玉野市番田2810-1

Tel:0863-66-5334

E-mail:jh4lix@po.harenet.ne.jp

鳥取県幹事 田村昭夫

〒682-0881 倉吉市宮川町2-74

Tel:0858-22-7707 Fax:0858-22-7707

E-mail:tanbaya@lime.ocn.ne.jp

島根県幹事 淀江賢一郎

〒690-0862 松江市比津が丘2-1-7

Tel:0852-26-0186

E-mail:hgyodoe@green-f.or.jp

山口県幹事 後藤和夫

〒759-0207 宇部市厚南七区平和町

Tel:0836-41-1164 Fax:0836-41-1177

E-mail:gotoh@h6.diom.ne.jp

日本鱗翅学会中国支部会報
第5号

発行日：2004年(平成16年)6月20日

編集者：金屋敷章裕・田村昭夫

発行人：本田計一

発行者：日本鱗翅学会中国支部